

広島平和記念資料館 令和5年度第1回企画展

新着資料展

—令和3年度寄贈資料—



大火傷を負った息子に着せた父親のワイシャツ

期間 2023年(令和5年)9月14日(木)～2024年(令和6年)2月27日(火)

会場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室

はじめに

広島平和記念資料館には、現在でも被爆者やその遺族の方々などから、大切にしてきた遺品をはじめとする被爆資料、自らの体験を描いた絵、当時の状況を撮影した写真などの資料が寄せられ続けています。

この展示会では、令和3年度(2021年度)に寄贈された744点の資料から、150点を紹介します。

自らの体験を数多く絵に描いてきたある被爆者の男性は、8歳で被爆死した妹を改めて絵に描きました。「妹は、なぜ人生8年、なのか!」、絵に書き込まれた言葉には肉親を亡くした無念が滲み出ています。

原子爆弾の使用が何をもたらすのか。ここに紹介する資料は、様々な側面から私たちに語りかけます。

2023年(令和5年)9月 広島平和記念資料館

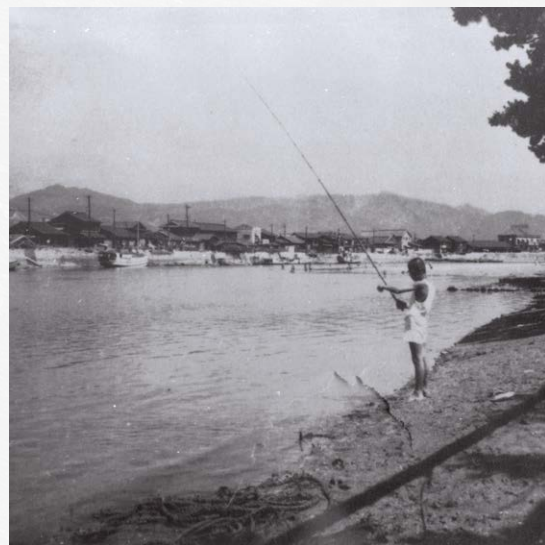
被爆前の広島



絵はがき「(広島)相生橋及丁字橋」

1934年(昭和9年)11月ごろ 猿楽町 益田崇教寄贈

広島県産業奨励館から相生橋を望む。右側に写るのは広島商工会議所です。



住吉神社付近から河原町を望む

1940年(昭和15年)ごろ 水主町 三田嘉一撮影

河原町に住んでいた三田嘉一さんが1940年(昭和15年)ごろに自宅周辺で撮影したものです。

広島陸軍被服支廠で開催された 子ども服製作の講習会

1932年(昭和7年)

出汐町 広島陸軍被服支廠

田場康己寄贈

広島陸軍被服支廠の被服技官だった田中政市さんは、講習のため全国各地に出張していました。この写真は、政市さんが持っていたアルバムに収められていたもので、当時の被服支廠での活動の様子が垣間見えます。





紙屋町交差点を走る花電車

1926年(大正15年)5月25日 紙屋町
 豊嶋要之助撮影 豊嶋起久子寄贈

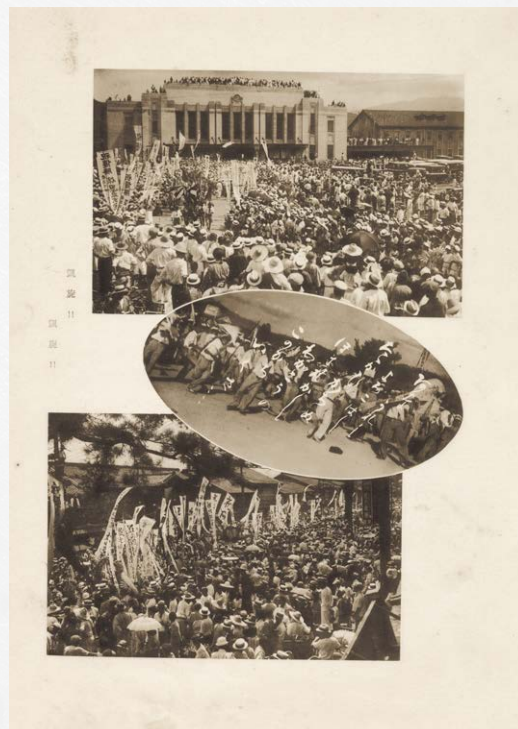
皇太子の行啓に合わせて走る花電車を紙屋町交差点の北側にあった建物から撮影したものです。撮影した豊嶋要之助さんは能楽師で、1945年(昭和20年)8月6日に被爆して亡くなり、遺体も見つかっていません。



昭和産業博覧会の記念絵はがき

1929年(昭和4年) 國重典世寄贈

1929年(昭和4年)、周辺7町村との合併による「大広島」建設を記念し、3月20日から5月12日まで、西練兵場、比治山公園、元宇品を会場とした昭和産業博覧会が開催され、約175万人が来場しました。



県立広島商業学校の卒業アルバムの一部

1930年(昭和5年)ごろ
 瀬川美智子寄贈

広島県庁に勤めていた瀬川舜一さん(当時32歳)は、原爆投下当日に古田町高須の自宅から出勤したまま、現在も行方不明のままです。残された妻の美智子さん(当時28歳)は、4人の子どもを育て上げました。これらは舜一さんが卒業した県立広島商業学校の卒業アルバムの一部です。同校が優勝した第15回全国中等学校優勝野球大会(夏の甲子園)に関する写真が掲載されています。



島病院の中庭にあった猿小屋の前で

1933年(昭和8年)～1945年(昭和20年)

細工町 島病院 島一秀寄贈

原子爆弾は、広島市の中心部にあった細工町の島病院の上空600メートルで炸裂しました。島病院は、1933年(昭和8年)8月31日に広島郵便局電話課の建物を改築して開院しました。島病院には、被爆前、病院2階の入院患者が眺める事ができるよう中庭に5～6匹の猿を飼育していた檻があり、近所の人たちも猿を見に来ていました。



中島本通り 藤井商会の店先で

1940年(昭和15年)～1941年(昭和16年)ごろ

中島本町 藤井末治郎撮影 藤井正雄寄贈

中島本町の中島本通りで小間物屋を営む藤井商会の前で撮影された写真。三輪車に乗っているのは寄贈者の姉の和子さん、その後ろにいるのが寄贈者の藤井正雄さん、店先に立っているのは母親のツキワさんです。撮影した父親の末治郎さんは、小網町での建物疎開作業に出勤していたところ被爆し、大野陸軍病院に収容されましたが8月9日に亡くなりました。

戦時生活から原爆投下へ



戦闘機献納のための募金活動で集まった資金と 広島実践高等女学校の生徒たち

1944年(昭和19年)2月ごろ 佐伯郡井口村 広島実践高等女学校
岡本久枝寄贈

広島実践高等女学校では、1943年(昭和18年)12月から1944年(昭和19年)2月ごろにかけ、海軍に戦闘機を献納するため募金運動を行い、6万円の資金が集まりました。生徒たちの前には、集まった現金や募金に使用した「献金箱」が置かれています。

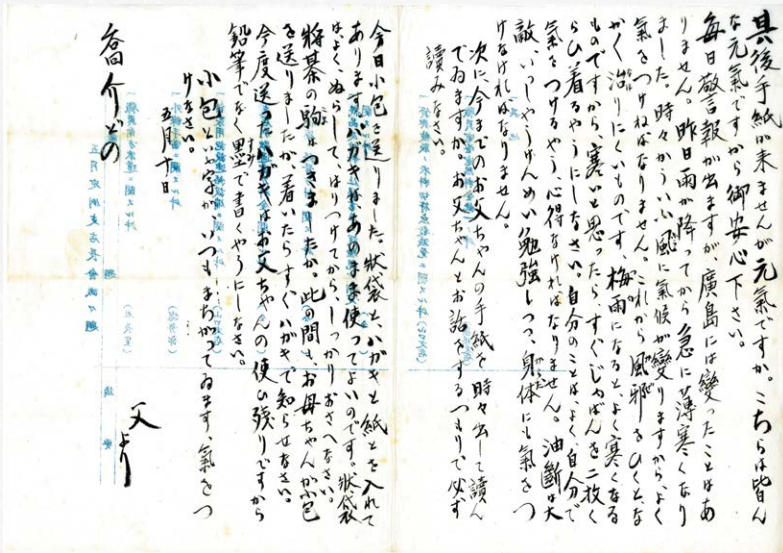


広島招魂社前で撮影された陸軍部隊の集合写真

1938年(昭和13年)9月26日 基町 広島招魂社

藤解詮雄寄贈

写真裏面に「昭和13年9月26日 於広島招魂社前 妻澤部隊 第一小隊 第二分隊」とあります。広島招魂社は1939年(昭和14年)に広島護国神社に改称されました。



疎開先に届いた父からの手紙

1945年(昭和20年)5月10日付 福間喬介寄贈

光道学校5年生だった福間喬介さん(当時10歳)は、1945年(昭和20年)4月12日から9月12日まで、山県郡都谷村の仙徳寺に学童疎開していました。疎開期間中、父の一郎さんと母の久子さんは喬介さんに宛て沢山の手紙や小包を送りました。父母やきょうだいは全員無事で、喬介さんは9月に家族と再会しました。



遺品となった姉からの手紙

1945年(昭和20年)4月28日付 下原都子寄贈

光道学校5年生だった川崎都子さん(当時10歳)も仙徳寺に学童疎開していました。広島市立第一高等女学校2年生だった姉の裕子さん(当時13歳)は、木挽町の建物疎開作業現場で被爆し、行方不明となりました。この手紙は、裕子さんが疎開中の都子さんに送ってくれたもので、都子さんは、手紙をお守り代わりとして大切にしていました。



遺品となったランドセル

前岡眞仁寄贈

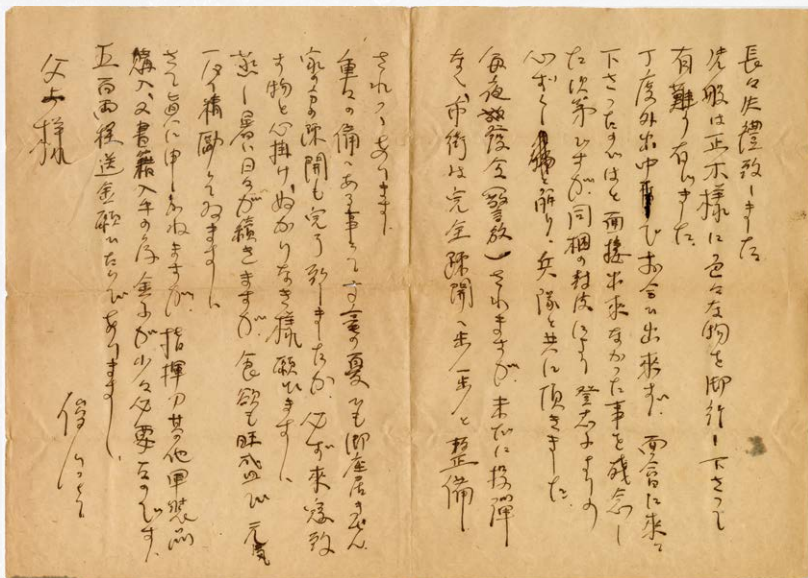
広島市立第一高等女学校1年生の前岡茂子さんは、木挽町の建物疎開作業現場で被爆しました。父親の喜三さんが連日市内を捜索しましたが、茂子さんを見つけることはできませんでした。このランドセルは茂子さんの遺品で、母親の清子さんが大切に保管していました。

遺品となった絵

増本洋子寄贈

広島市立第一高等女学校2年生だった佐藤知子さん(当時13歳)は、建物疎開の作業現場で被爆し、行方不明となりました。兄の洋一さん(当時16歳)が懸命に捜索しましたが、原爆投下約2週間後から洋一さんの髪の毛が抜け始めたため断念しました。この絵は知子さんが小学校4年生の時に描いたもので、体操する子どもたちが描かれています。

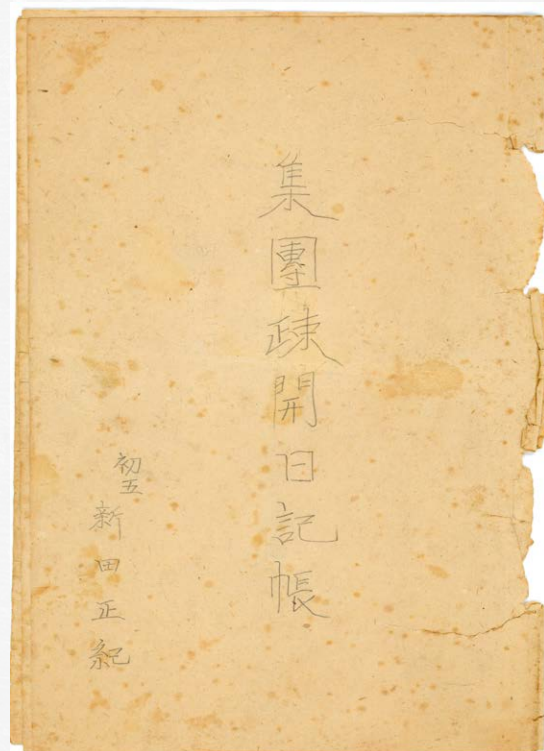




岡田俊治さんから父・三代治さん宛ての手紙

1945年(昭和20年)7月18日付 武鏡正勝寄贈

岡田俊治さん(当時22歳)は、陸軍の見習士官として中国軍管区輜重兵補充隊に所属しており、部隊のあった基町で被爆して頭部に傷を受け、両手に火傷を負いました。戸坂国民学校に開設されていた広島第一陸軍病院戸坂分院に収容されて手当を受けましたが、8月14日に亡くなりました。この手紙は生前、俊治さんが父親の三代治さんに送ったものです。



集団疎開日記帳

新田英明寄贈

新田孝作さん(当時40歳)は、被爆により妻・タメ子さん(当時39歳)、長男・孝洋さん(当時13歳)、次男・正紀さん(当時11歳)を亡くしました。家族3人を失い、残された孝作さんは死をも考えましたが、故人たちを誰が供養するのかと思いとどまり、辛い思いを堪えて生きることになりました。この日記は正紀さんが疎開中に書いていたものです。



京都帝国大学調査団が広島で採集したサンプル

清水勝寄贈

京都帝国大学理学部荒勝文策研究室の清水榮さん(当時30歳)は、1945年(昭和20年)8月10日と13～14日の2度にわたって広島で調査を行いました。1度目の調査では十数カ所のサンプルを京都に持ち帰り、12日に計測したところ西練兵場の土壌のみ通常より高い放射線量を検出したため、広島を再訪し市内百数十カ所でサンプルを採取し京都に持ち帰りました。これらのサンプルを測定した結果、荒勝は広島に投下されたのが原子爆弾であると結論づけました。

軍刀

菅彩帆寄贈

陸軍第五師団司令部に所属する主計将校だった菅安三さん(当時48歳)は、陸軍用地のある二葉山で作業していたところ被爆し、中山峠の収容先で亡くなりました。この軍刀は、安三さんが当日身に着けていたもので、部下から家族のもとに届けられ、妻の榮子さん(当時39歳)が大切にしていました。





金庫に入っていた弁当箱

爆心地から390m 材木町 加藤純久寄贈

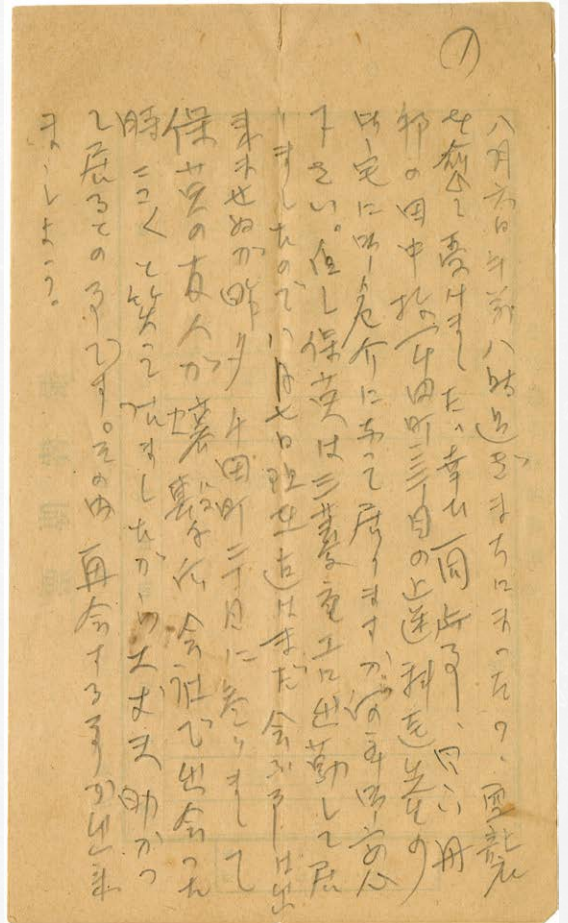
材木町にあった加藤アサさん(当時66歳)の自宅にあった金庫に入ったまま、原爆による火災で焼けたものです。アサさんは当時一人で暮らしていましたが、現在も行方不明のままです。弁当箱の中には、がま口の口金や印鑑などが入っています。



木札

五島三津子寄贈

中国配電株式会社に勤めていた山崎益太郎さん(当時54歳)は、小町にあった本店の2階で被爆しました。益太郎さんは頭にけがを負いながらも雨樋を伝って建物から逃げ出しました。広島市立第一高等女学校2年生だった次女の仁子さん(当時13歳)を、建物疎開作業に動員されていた県庁付近で見つけましたが、大けがを負っていました。牛田町の親戚の家まで仁子さんを背負って避難する途中で、仁子さんは亡くなりました。この木札は、益太郎さんが保管していたもので、「天神町義勇会 会長 山崎益太郎」と書かれています。詳細はわかりません。



被爆状況を伝える手紙

松林登喜子寄贈

医師の松林保太郎さん(当時54歳)は、千田町二丁目の自宅兼医院で被爆し、爆風で壁に叩きつけられて一時気を失いましたが、妻の千代さんの呼びかけで意識を取り戻しました。保太郎さんは左腕や頭部に傷を負っていましたが外に出て、御幸橋西詰の交番付近の空地に仮救護所を開設し、火災の迫る昼ごろまで負傷者の手当を行いました。その後、安芸郡奥海田村や矢賀町などで約2年間にわたり被爆者の治療に当たりました。この手紙は、福山市に住む次女に宛て、8月7日と8日に書かれたものです。



ガラスの破片が残る桐たんす

爆心地から2,500m 皆実町三丁目

田場康己寄贈

田場都美子さん(当時19歳)が当時使用していて、被爆当日は皆実町三丁目の自宅にあったものです。都美子さんの自宅は、火災を免れたものの原爆による爆風によって窓ガラスが割れ、家屋が基礎からずれるなどの被害がありました。このたんすには、ガラスの破片が突き刺さった痕があり、一部には破片が残ったままになっています。都美子さんは戦後結婚して家を出る際にたんすを持ち出し、亡くなるまで使用していました。



ズボンとワイシャツ

個人寄贈

広島市立中学校2年生の檜垣浩さん(当時15歳)は、爆心地から900メートルの小網町の建物疎開作業現場で被爆し、全身に大火傷を負いました。浩さんは己斐にあった父親の兵市さんの職場まで自分で歩き、そこでその日のうちに亡くなりました。ズボンは被爆時に浩さんが着用していたもので、著しく損傷しています。ワイシャツは大火傷を負った浩さんに兵市さんが着せてあげたもので、血液やマーキュロクロム液が付着しています。



被爆後の救護活動で使用された医薬品

今岡博信寄贈

今岡幹枝さん(当時19歳、旧姓：大木)は、1942年(昭和17年)に日本赤十字社広島支部病院救護看護婦生徒養成部に入学し、1944年(昭和19年)3月に卒業しました。その後、召集を受け、同年7月から賀茂郡黒瀬町の賀茂海軍病院第659救護班に配属されました。原爆投下時にどの病院で勤務していたかは定かではありませんが、1945年(昭和20年)8月7日には広島市内に入り救護活動を行いました。この医薬品は、幹枝さんが救護活動で火傷の治療薬として使用したものです。

広島第一陸軍病院江波分院の看護婦たち

1943年(昭和18年)4月6日

江波町 広島第一陸軍病院江波分院

胡子栄寄贈

日本赤十字社の救護看護婦だった胡子ヒサノさん(当時23歳、旧姓：香田)は、原爆投下時、広島第一陸軍病院江波分院に勤務しており、被災者の救護に従事しました。





物差し

森川高明寄贈

被爆前、森川高明さん(当時6歳)と父親・寛さん(当時35歳)、母親・アキコさん(当時32歳)、姉・美達子さんの家族4人は天神町の天城旅館に住んでいて、1945年(昭和20年)3月からは佐伯郡八幡村へ疎開していました。被爆当日、肺炎を患い佐伯郡河内村の病院に入院していた高明さんは病院で原爆の閃光を目撃しました。病院の窓ガラスが割れ、アキコさんがつくってくれたおかゆの中にガラス片が入り、食べる事ができませんでした。これらの物差しはアキコさんが持っていたものです。



焼けたくぎ

爆心地から160m 猿楽町 熊澤藍子寄贈

小谷正男さん(当時50歳)は、広島県産業奨励館内にあった広島県土木部広島出張所で勤務中に被爆しました。数日後、妻のコミチさん(当時50歳)と娘の志津子さん(当時19歳)が正男さんを捜索しましたが、産業奨励館の中は余燼がくすぶっていて入れず、遺骨や遺品を見つけることはできませんでした。このくぎは、正男さんの同僚が正男さんの席があった辺りを探し、8月15日に家族の元に届けられたものです。



法衣

大西茂子寄贈

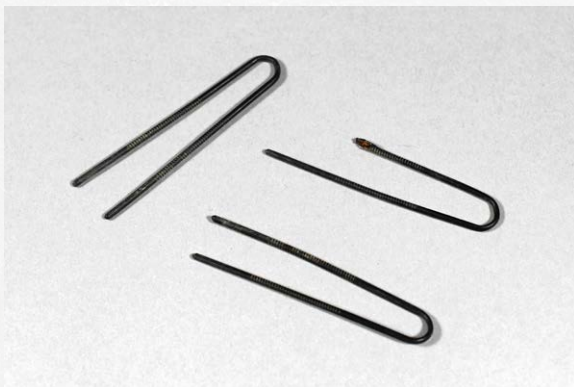
材木町にあった寺院・安楽院の住職だった大西密禅さん(当時41歳)は、自転車で比治山方面に向かっている際に被爆し、似島の救護所に搬送されましたが8月10日に亡くなりました。大西家では、密禅さんをはじめ、妻・シズコさん(当時36歳)、次女・釋枝さん(当時12歳)、三男・敏夫さん(当時4歳)、三女・祥代さん(当時生後144日)の5人が原爆で亡くなりました。この法衣は密禅さんのもので、原爆投下時は広島県北部に疎開中だった長男の佳夫さん(当時10歳)が保管していたものです。



父の軍服

久保田圭二寄贈

久保田勝人さん(当時31歳)は、原爆投下当時佐伯郡大竹町にあった陸軍部隊に所属していましたが、出張で広島市基町の陸軍宿舎に滞在していたところ被爆しました。妻の郁枝さん(当時25歳)も勤労奉仕の動員先で被爆し、8月10日に亡くなりました。寄贈者の圭二さん(当時2歳)と姉(当時5歳)の二人の子どもが残され、祖父母に育てられました。この軍服は、勝人さんの遺品として保管されていたもので、圭二さんが20歳になった際に祖母から受け取ったものです。



ヘアピン

梶山修治・斎藤玲子寄贈

梶山ハルさん(当時61歳)は、国民義勇隊として雑魚場町・国泰寺町の建物疎開に動員され被爆し、死亡したものと考えられます。遺体は見つかりませんでしたが、平和記念公園にある原爆供養塔に遺骨が安置されている原爆死没者のうち、氏名等が判明しながら遺族が分かっていない人の名簿「原爆供養塔納骨名簿」の中に「鍛冶山はる」と記載されたのが梶山ハルさんであることが確認され、2021年(令和3年)10月24日に遺族に遺骨等が入った骨壺が返還されました。骨壺の中には、遺骨のほか、ヘアピン、遺髪、「鍛冶山はる」の氏名が書かれた紙片が入っており、遺骨以外が資料館に寄贈されました。



満洲にいる家族に宛てた手紙

梶山修治・斎藤玲子寄贈

梶山ハルさんの孫で広島高等師範学校附属山中高等女学校2年生だった梶山初枝さん(当時13歳)は、雑魚場町での建物疎開作業現場で被爆したものとみられ、行方不明のままです。初枝さんの家族は、1944年(昭和19年)頃、初枝さんとハルさんを広島に残し、満洲に移住しました。この手紙は満洲にいる家族に宛てて書かれたものです。母の瀧子さんが手紙を読み涙がこぼれたため、文字が滲んでいます。

変形したガラスびん

國重典世寄贈

國重博俊さん(当時24歳)は、傷病兵として入院していた広島第二陸軍病院三滝分院で被爆し、割れた窓ガラスの破片が体中に刺さりけがを負いました。治療を受けて回復し、9月半ばには退院することができました。このガラスびんは、博俊さんが戦後革屋町で拾ったものです。



金鶏勲章

爆心地から3,800m 牛田町

畑口次子寄贈

金倉榮さん(当時36歳)は、原爆投下時は牛田町にあった自宅にいたものと思われます。翌7日、市内中心部に入り知人を捜索しました。この勲章は、榮さんが補充兵として1939年(昭和14年)から1941年(昭和16年)まで日中戦争に従軍し、授与されたものです。



罹災証明書

原田清寄贈

楠木町四丁目に住んでいた原田貞一さん(当時40歳)一家の罹災証明書。貞一さんは、建物疎開作業のため集まった鶴見橋のたもとで朝礼中に被爆し、大火傷を負い救護所に運ばれました。妻のヨシエさん(当時29歳)は、勤務先だった自宅近くの針工場で被爆しましたが、けがはありませんでした。一度は貞一さんの実家である高田郡郷野村まで避難しましたが、大八車を借りて再び市内に入り、宇品にあった救護所で貞一さんを見つけました。貞一さんは郷野村まで連れ帰られ、後に回復しました。



軍隊手帳と襟章

山下房子寄贈

中国軍管区輜重兵補充隊に所属していた部谷一真さん(当時22歳)は、原爆投下時には安佐郡福木村馬木の訓練場にいたため直接の被爆は免れました。市内から避難してくる被災者の手当を行ったほか、当日から広島市内に入り原隊で救援活動を行いました。1週間から10日ほど市内と馬木を行き来して活動を続けた後、部隊は安佐郡可部町に移り10月まで残務処理を行ったと言います。この軍隊手帳と襟章は、一真さんが保管していたものです。

かんざし

飯田國彦寄贈

飯田稔子さん(当時25歳)は、長女の眞基子さん(当時4歳)、長男の國彦さん(当時3歳)とともに、爆心地から約1,000メートル弱の水主町の実家に滞在していて被爆しました。何とか避難し、後に山県郡の親戚の家に移り看病を受けました。放射線の影響で脱毛、皮膚の変色、発熱、下血、鼻血の症状が現れ、9月4日、眞基子さんが亡くなり、翌5日には「そんなに(親切に)してくれたらなかなか逝かれん」と言い残し、稔子さんが亡くなりました。このかんざしは、1940年(昭和15年)の結婚式で稔子さんが身に付けたもので、疎開先にあったため被災を免れました。





廃虚で拾ったタイル

ジェームズ・ノウルズ寄贈

イギリス海軍に所属していたラルフ・ノウルズさんは、被爆後の広島を訪問した際に写真を撮影し、廃虚からタイルを持ち帰りました。ラルフさんは、タイルを持ち帰った理由を「そこで見たうち、形が残っていた唯一のものだったから」と語っていました。



人形

ラリー・ボンズ寄贈

アメリカ陸軍の兵士だったジョセフ・F・ボンズさん(当時21歳)は、1945年(昭和20年)10月から1946年(昭和21年)1月まで広島に滞在しました。この人形はジョセフさんが広島滞在中に収集したものです。

戦後資料



被爆死した油谷重工業株式会社関係者に関する各種資料

コベルコ建機株式会社寄贈

安佐郡祇園町にあった油谷重工業株式会社では、戦域義勇隊として広島市内天神町の建物疎開作業のため人員を送っていました。同隊には20戸の建物の取り壊しが割り当てられており、1945年(昭和20年)8月5日までに19戸の作業が完了し、8月6日は最後の1戸の解体のため161人が出動していましたが、被爆により全員が亡くなりました。これらは、亡くなった職員と動員されていた生徒たちの過去帳や履歴書、名簿などです。

細工町の広島郵便局付近から北北東を望む

細工町 ダイアン・バーティナ寄贈

手前に写るのは崩れた広島郵便局の建物。右奥には爆心地・島病院の玄関付近の残骸が見えます。





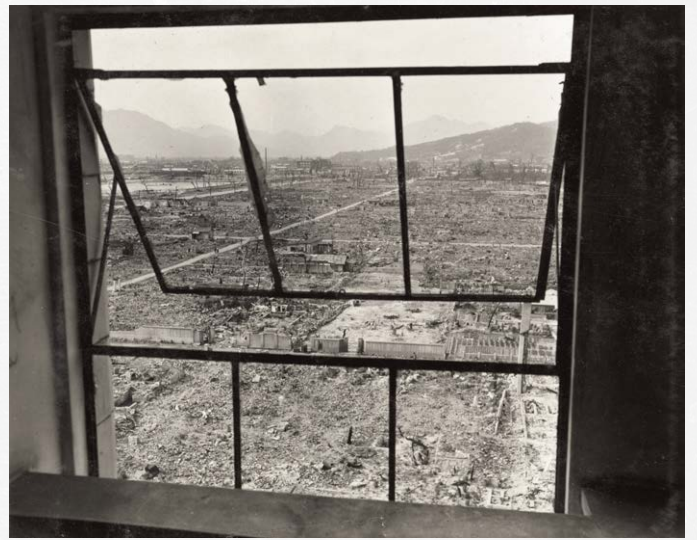
国泰寺の大クスノキ

1946年(昭和21年)ごろ 小町 大沼隆幸撮影 久保田圭二寄贈
 国泰寺に生えていた大クスノキ。その右後ろに見えるのは日本銀行広島支店です。



原爆ドーム付近にあった吉川清さんの土産物店

1952年(昭和27年)～1953年(昭和28年)ごろ 個人寄贈



中国新聞社新館から北北西を望む

1946年(昭和21年)3月ごろ 上流川町 吉山寛之寄贈



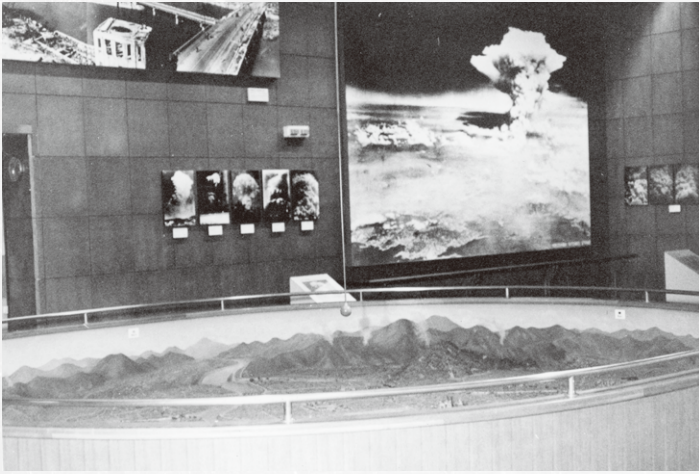
相生橋から南東を望む

1945年(昭和20年)冬～1946年(昭和21年)年ごろ 相生橋 三宅伸之寄贈
 相生橋から南東を望む。右から広島県産業奨励館、中央に日本赤十字社広島支部、左奥に福屋百貨店が写っています。



平和大橋

1952年(昭和27年)ごろ 山田勘一撮影・寄贈
 平和大橋はアメリカの彫刻家イサム・ノグチが設計し、1952年(昭和27年)3月に完成しました。



最初の常設展示リニューアルを終えた広島平和記念資料館

1975年(昭和50年)7月31日 横田禎昭撮影・寄贈

広島平和記念資料館の初代学芸員である横田禎昭さんが、最初の常設展示リニューアルオープンを翌日に控え、資料館本館展示室を撮影したものです。

被爆50年を記念して日本に招かれた 元南方特別留学生たち

1995年(平成7年)8月6日 興南寮跡碑

早川幸生撮影・寄贈

左から、ハッサン・ラハヤさん(ジャワ)、サム・スハエディさん(ジャワ)、モンウィンチューさん(ビルマ)、花岡俊男さん(当時、広島文理科大学学生)、アブドゥル・ラザクさん(マライ)、ペンギラン・ユソフさん(北ボルネオ)、ヴェリヒリオ・デ・ロス・サントスさん(フィリピン)、ハリム・アバカルさん(フィリピン)、シャリフ・アデイル・サガラさん(インドネシア)。



原爆の絵

昭和20年8月7日

8月6日の夜、寒さから殺けて85℃、晩部隊運輸部 軍医婦人が灰と土の間に来られたのが 40才前後の男性だった。私を見たり、「年、は、なんぼヤ!」「どこの中学校や!」など云われ相槌を打っていたが急に「太郎!!こっちに来て!!」「お父さんやで!」と大声で言われ戸惑っている内、静かになった。



この人も運び出された。

2021年令和3年7月 尾崎 稔 89歳

救護所で隣になった男性

1945年(昭和20年)8月7日夜 安芸郡坂町鯛尾

尾崎稔作・寄贈(被爆時の年齢13歳/絵を描いた年齢89歳)

[作者の言葉から]

私を見るなり「年、は、なんぼヤ!」「どこの中学や!」などと云われ相槌を打っていたが急に「太郎!!こっちに来て!!」「お父さんやで!」と大声で言われ戸惑っている内、静かになった。

被爆死した妹

尾崎稔作・寄贈(被爆時の年齢13歳/絵を描いた年齢89歳)

[作者の言葉から]

妹は、なぜ人生8年、なのか!

昭和20年初期、妹は次兄(狷介)と2人で、父の里、安芸郡戸坂村、祖母宅へ縁故疎開していた。

3月に、次兄(狷介)が中島国民学校の集団疎開に参加した、ため1人になった。

1人で淋しく、しているだろうと、母は夏休み中だけでも、家族(母、祖母、姉、長兄)と一緒に過すため7月下旬、広島市大手町八丁目の我が家に妹を連れ帰った。

……昭和20年8月6日、戦争は、何の罪もない少年、少女達を原子爆弾と云う凶器で多数消してしまった。惨い 悔しくて言葉にならない。

*一部画像を加工しています。

妹はなぜ人生8年、なのか!

昭和20年初期、妹は次兄(狷介)と2人で、父の里、安芸郡戸坂村、祖母宅へ縁故疎開していた。
3月に、次兄(狷介)が中島国民学校の集団疎開に参加した、ため1人になった。
1人で淋しく、しているだろうと、母は夏休み中だけでも、家族(母、祖母、姉、長兄)と一緒に過すため7月下旬、広島市大手町八丁目の我が家に妹を連れ帰った。
妹は終戦で八丁八丁は吉野町、吉野町は加藤町、加藤町は吉野町と合っていたように思う。
昭和20年8月6日、戦争は、何の罪もない少年、少女達を原子爆弾と云う凶器で多数消して
しまった。惨い(ふい) 悔しくて言葉にならない。



被爆場所推測: 大手町八丁の自宅 (現在不明)
(妹) 尾崎幸子 昭和11年10月26日生 女
中島国民学校2年生 親友(客の前) 昭和20年
東いでラ一服は火あきたつた。

2021年4月3日尾崎稔作



御幸橋西詰で写真を撮影するカメラマン

1945年(昭和20年)8月6日午前11時ごろ 御幸橋

西岡誠吾作・寄贈(被爆時の年齢13歳/絵を描いた年齢89歳)

[作者の言葉から]

御幸橋西詰めの派出所の横で、市電通りの方をぼんやり見していました。

その時、突然カメラを持った軍服姿の男性が右の方から現れました。軍服姿だが階級章がないので、「スパイ」だと思いました。近くにいた人々も「あれはスパイじゃ」「巡査に…」「憲兵に…」と騒ぎが大きくなりました。

カメラマンはファインダーを覗いたり、私たちを見たりを2~3回繰り返していましたが、何だか慌てた悲しい顔をして立ち去りました。私が見たのは1分位でした。



8月6日の夜空。空が二つに分かれていた。

1945年(昭和20年)8月6日夜

皆実町 切明千枝子作(被爆時の年齢15歳/絵を描いた年齢91歳)

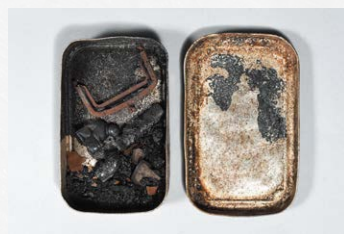
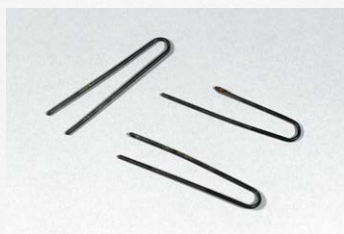
広島市立長東中学校校長 角雄二寄贈

[作者の言葉から]

被爆して家が崩れてしまい、外で寝た時の空の思い出です。
広島の空が、くっきりと二つに別れていて、北西の方は血の色のように真っ赤に、空が焼けていました。

南東の方は、一面の星空で、数限りない流れ星が流れていました。

流れ星は、死んでいった人たちの魂がもしかしたら天へ昇っているのかなと思ひ、涙を流しながら眺めた記憶があります。



広島平和記念資料館 令和5年度第1回企画展

新着資料展—令和3年度寄贈資料—

期間 2023年(令和5年)9月14日(木)～2024年(令和6年)2月27日(火)

会場 広島平和記念資料館東館1階企画展示室

発行 広島平和記念資料館学芸課

730-0811 広島市中区中島町1-2

TEL 082-241-4004 FAX 082-542-7941 <https://hprmuseum.jp/>



- ① 遺品となったランドセル 前岡眞仁寄贈 ② 被爆死した会社関係者に関する資料を保管していた木箱 コベルコ建機株式会社寄贈
 ③ 変形したガラスびん 國重典世寄贈 ④ 遺骨とともに骨壺に入っていたヘアピン 梶山修治・斎藤玲子寄贈
 ⑤ 被爆死した妹 尾崎稔作・寄贈 ⑥ 金庫に入っていた弁当箱 加藤純久寄贈